

PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

LETTER

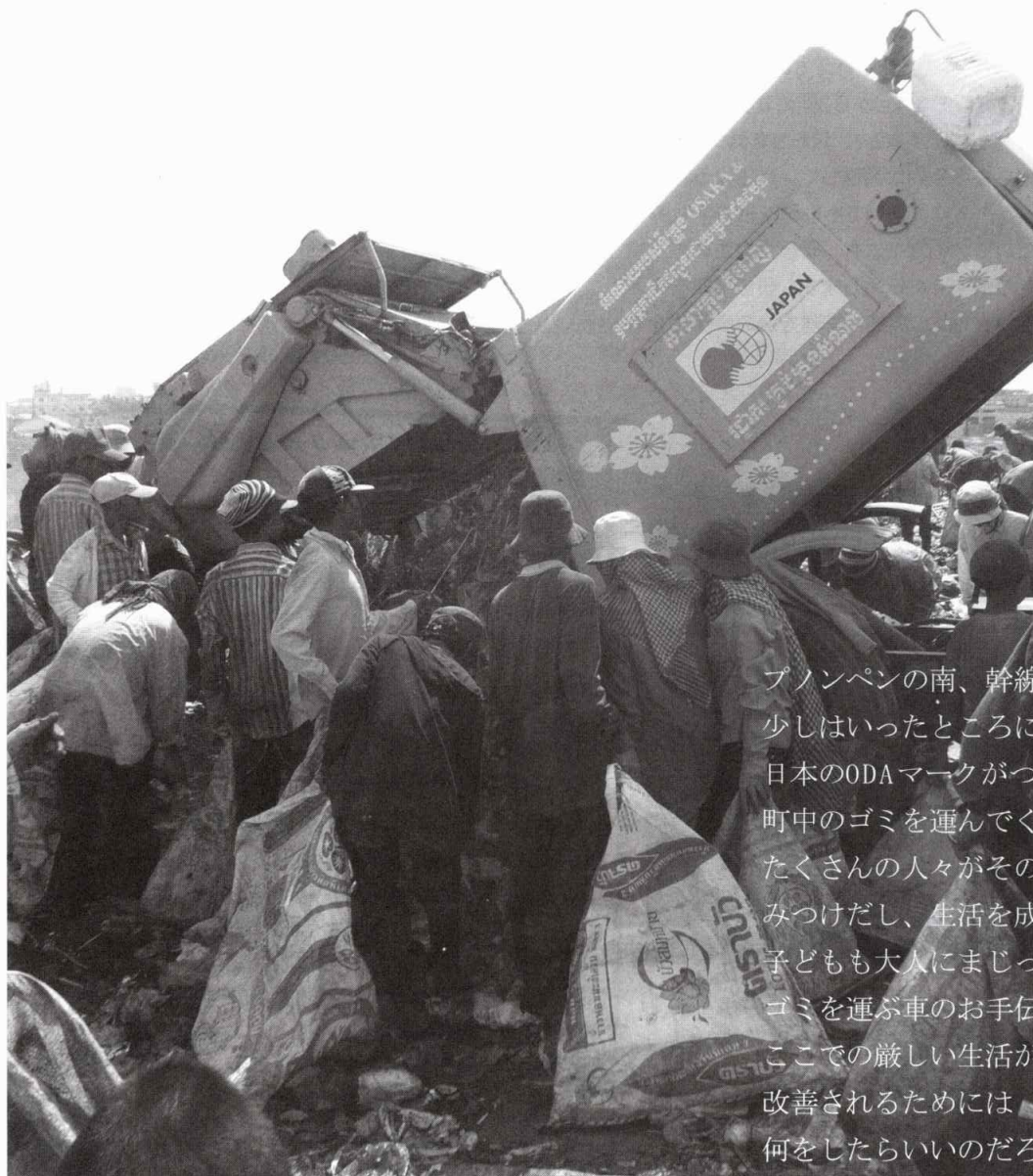
111

2009.7

- 2009年度事業計画
- 研修生レポート&研修生の村、その背景
- 同じ買うなら使うなら「ハチだけの仕事」

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和 (Peace) と健康 (Health) を担う人づくり (Human Development) をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981年からはじまりました。

発行： 財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人： 藤野 達也
住所： 〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867
E-mail: phd@mb1.kisweb.ne.jp
URL: <http://www.kisweb.ne.jp/phd>
定 価： 100円
郵便振替口座： 財団法人ピー・エイチ・ディー協会
01110-6-29688



ブノンペンの南、幹線道路から
少しはいったところに、ここはある。
日本のODAマークがついたゴミ収集車が
町中のゴミを運んでくる。
たくさんの人々がその中から売れるものを
みつけだし、生活を成り立たせている。
子どもも大人にまじって働いている。
ゴミを運ぶ車のお手伝いだけでなく
ここでの厳しい生活が
改善されるためには
何をしたらいいのだろう。

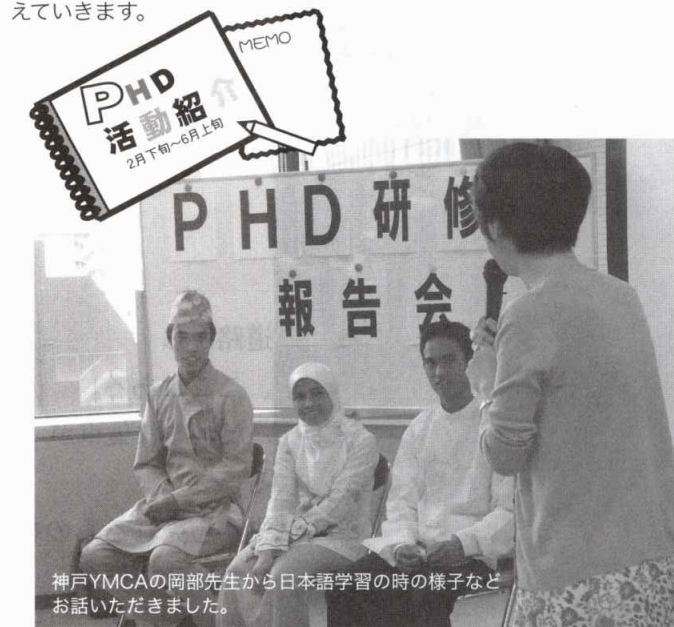
2009年度 事業計画

ご協力をひきだす魅力ある事業を

事業報告書でもお伝えしましたが、昨年度の決算は赤字となつてしまいました。大きな原因は基本財産運用収入が見込みを下まわったことによります。これは景気に左右されるもので、必ずしも確実なものではありません。会費とご寄附を増やすことが、安定した運営の基本です。それにつながるように、皆さまに支持していただける事業内容の充実と効果的な広報を心がけていきます。これまででもできるだけの節約を行ってきましたが、さらなる経費減の必要から、今年度はこれまで年4回発行してきた会報を3回にします。一方でホームページを新しくし、情報の量を補いたいと思います。皆さまのご理解をお願いいたします。本号送付の6月は会費納入のお願いの月です。「平和と健康を担う人づくり」のために、会員の皆さまのご理解をお願いします。また会員紹介キャンペーンも継続中です。お知り合いにもぜひお勧めください。

啓発

PHD活動を支える人の輪を広げるための具体的な取り組みとして、勉強会、主催自主講座の実施、1年間を通しての農林業プログラムの実施、出前講座、スタディツアー報告会の実施を考えています。また今年度は財政的な理由から、会報の発行を年4回から3回に変更します。発行回数が減る中で、できごとの報告にとどまらず、足もとを見つめ直し、日々の行動につながるきっかけを積極的に発信していけるような紙面作りを目指します。またホームページにおいても動画を取り入れることで、遠方からご支援いただいている方々にも、研修生の生の声、帰国研修生の活動の様子をわかりやすくお伝えします。研修事業を支えるための収入増のためのキャンペーンの実施、寄附方法の多様化を考えていきます。



神戸YMCAの岡部先生から日本語学習の時の様子などお話をいただきました。

6月6日、神戸市青少年会館で第27期研修生の来日報告会を行いました。3人の村の様子を紹介し、それぞれおぼえたての日本語で今後の研修に向けての抱負を語りました。質疑応答では、3人の村、過去の研修生との繋がりなどについての質問もできました。PHDの提唱者岩村先生の奥様にもネパール語の通訳を急遽お願いする場面もあり、和やかな雰囲気の中ですすめられました。

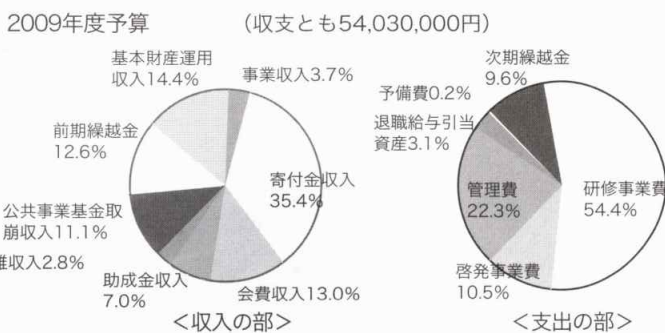
研修

昨年度に引き続き、事業改善に取り組みます。国内研修事業については昨年度の作業を見直し修正しながら、研修目標の設定や研修内容の確認・振返りを定期的に行い、研修生の理解を深められるように場を整えます。更に、今後、研修をより充実したものにしていけるよう、まずは農業テキスト作り着手します。海外事業についてはまず、帰国研修生にとって役に立つ情報を定期的に研修生向けのレターで記事にしたり、要望に応じて資料作りをしたり、村での活動をサポートします。また、スタディツアーでは参加者にも積極的に関わってもらい、村や地域の情報を収集する作業を進めます。

総務・財務

公益法人制度改革を受けて、特定公益増進法人認定を受けているNGOとして公益認定を目指して新法人移行をすすめていきます。そのための機関整備はじめ組織体制の見直しを行い、よりボランティア参加を受けることによってPHD運動の更なる広がりを推進していきます。

100年に一度と言われる経済不況を受けてPHDも厳しい状況にあります。会員ならびに協力者の皆様より、より支援をいただけるようプログラムの効率的遂行に努めていきます。



- 2月16日～ 南山短期大学インターン受け入れ (3名)
2月20日 仁川学院中学校講義
2月26日 国際ソロプチミスト姫路西バザー
3月7日 第26期研修生帰国報告会
3月9日 兵庫県立東播工業高等学校講演「生きるとは分かち合うこと」
3月10日～18日 フィリピン比較研修旅行
3月17日 兵庫県立国際高等学校講演「私たちにできる国際貢献」
4月4日 リエゾン「布を楽しみ、アジアに親しむ」
4月7日～ 聖和大学講義「アジア文化論」(全15回)
4月18日 みみずく舎「布を楽しみ、アジアに親しむ」
4月14日、21日 立命館大学文学部講義「NGOボランティア組織論」
4月30日 姫路市立網干西公民館講演「草の根の国際交流」
5月7日 兵庫県立国際高等学校講義「フェアトレード」
5月8日 神戸大学国際文化学部国際文化特殊講義「開発途上国の課題解決方法」
5月16日 吉備国際大学大学院国際講演会
6月1日 神戸大学発達科学部附属住吉中学校ポスターセッション
6月3日 研修指導者会
6月4日 堺清陵ロータリークラブ卓話
6月6日 第27期研修生来日報告会
6月10日 加古川市老人大学院講義
6月11日 神戸市シルバーカレッジボランティア報告会 バザー
6月12日 神戸市シルバーカレッジ講義
6月13日 農業体験 岡野圭佑さん・美代子さん宅

東西南北 問題解決 取組日記

9年半ぶりのソコムさん

2月下旬、関西国際大学のプログラムのお手伝いを兼ねて、久しぶりにカンボジア、プノンペンにでかけた。この国からはこれまでに3人の研修生を招いてきた。カウンターパートの団体が活動を休止してしまったため、現在は研修生たちとの円滑なやりとりはむずかしい。プノンペンにソコムさん(93年度)、プノンペンから車で3時間ほどのタケオ州にヴァナさん(93年度)とカエウさん(95年度)が帰っているが、今回はソコムさんと連絡がとれ、自宅を訪ねることができた。



このとき長男はバイクタクシーのアルバイトでお出かけ

日本では養鶏を中心とした農業の研修をしたソコムさんは帰国後は農業省に復職し、土壌改良を担当している。家族は奥さんと法律を専攻する大学生の長男、薬剤師をめざす長女、小学生の次男の3人の子ども。役所の仕事とは別に、養鶏にとりくんできたが、数年前、鶏を軍隊にとられてしまったとかで、今はお休み中。機をみて、またはじめたいとのことだった。

ボルボト時代に親、兄弟を失い、苦労してきたソコムさんは、自分の子どもには十分な教育をと考えているのだろう。しかし、彼の50\$の月給では到底足らず、奥さんが公立の学校の先生だけでなく、その後の時間に家庭教師を掛けもちし、やりくりをしている。

プノンペン市街は車、バイクがあふれ、活気が感じられる一方で、都市と農村、また都市の中でも格差が広がっていることもきいた。

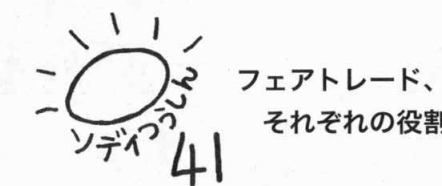
巻頭写真のステメンチャイは、ソコムさんの家から遠くない。ざっと40ヘクタールの土地に毎日トラック200台分のゴミが捨てられる。そこでビニール、



ペットボトル、金属などを拾う人の稼ぎは一日3000リエル(約75円)と聞いた。農村で食べていけないで、町へ出てきたもの他に仕事がなく、ここでゴミを拾う。あちらこちらで煙のぼり、発ガン性物質の発生も心配されている。

日本のJICAが06年から都市環境美化計画を実施したが、カナダ系の会社とプノンペン市のあいだに40年契約が結ばれており、08年にJICAの計画は打切りとなったという。この集積所自体は別の場所に移転することになっているが、ただ集めて捨てるだけのままでは、根本的な解決にはならない。ゴミの集め方、分別、再利用を系統だて、そこにまともな労働条件の仕事が成り立つしくみへのお手伝いが必要に思う。

総主事代行 藤野達也



4月4日、18日に神戸のフェアトレードショップ「Liaison(リエゾン)」と「みみずく舎」が主催する「フェアトレード+国際協力セミナー」でカレンの草木染め手織り布のお話をさせていただきました。06年度国内研修生の上田浩代さんが、カレンの村で学んだ織りを実演し、どのようにつくられているのかということも見ていただきました。最近「フェアトレード」ということばを頻りに耳にするようになりました。PHD協会で引きうける講演の演題や授業の中でもそれについて取り上げて欲しいと言われることが増えてきました。フェアトレードとは、大きくいえば途上国でつくられた商品を適正な価格で

取引し、途上国の人々の生活改善と自立を目指す貿易を意味します。

一口にフェアトレードと言っても、いろんな切り口があります。そしてその背景は様々です。コーヒーやチョコレートなどの生産者に対して児童労働撤廃の運動を行っている団体もあれば、手工芸品を通して難民支援を行っている団体もあります。PHDでは帰国した研修生の村に生活する作り手の人とつながっています。彼らの持っている伝統を守り、現金収入にも協力するというものです。活動の形態は多様ですが、生産者と消費者がお互いに信頼関係を築き、継続していくという根本はみな同じです。

かわいそうだからといって一度買ってもらうと、品質に問題があったり、おいしくなかったりでは続きません。また欲しい、人にすすめたいと思ってもらえるものを。公正な取引の条件

づくりとともに、商品にも魅力が必要です。

フェアトレードをブームに終わらせないためには、生産者と取りつぐ側の努力とともに、買うみなさんにその商品の背景を理解していただくことが不可欠です。「同じ買うなら」何を選びましょうか。

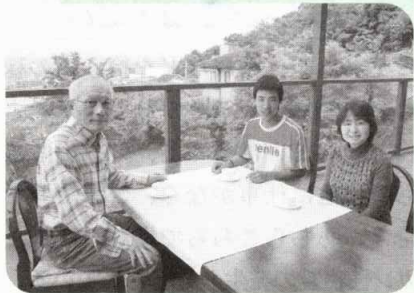


布の里を訪ねるタイ・スタディツアー 日程 12月23日～2010年1月3日 参加費 約20万円 興味がおありの方はお問い合わせください。

27期生研修生レポート

滞在家庭

—1年間お世話になります。



中林 清さん・美知代さん
(神戸市東灘区)

前年度に引き続き研修生の滞在を1年間引き受けていただくことになりました。中林さんはボランティアグループをまとめる中心的役割も担ってくださり、今年度は幅広く活動をサポートしていただきます。



梶原 正徳さん・早苗さん
(神戸市東灘区)

ビルマからの研修生にとって日本の家族とも言える梶原さん宅で、今年度も1年、ザーナウンさんがお世話になります。これまで研修生をお支え下さったご経験から、ザーナウンさんをサポートしていただきます。



朝日 晴峰さん・佐智代さん
(神戸市垂水区)

PHD研修生のホームステイ受入れは3年ぶり2度目です。前回の受入れ時から新たに家族が増え、インドネシアの家庭を思わせるような大家族に。保育を勉強するロザさんにとっては、常に学べるぴったりの環境です。

ビショさん
(21歳・ネパール)

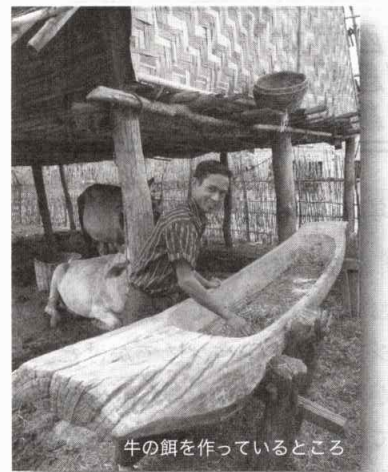


ビショさん(左)とお父さん

ネパールから11年ぶりの研修生となったビショさんは、笛で伝統音楽を演奏したり、絵を描いたりすることが得意な、芸術の才能を持ち合わせた青年です。選考の面接時にはとても寡黙でしっかり者に見えたビショさんですが、来日してみるととても冗談好きであることが判明。他の研修生は既にあきれ気味。その明るさを研修に生かして、皆の期待に応えて欲しいと思います。

ザーナウンさん
(21歳・ビルマ)

昨年度の研修生の村からバイクで15分のところにあるヨンピン村から選ばれました。2002年度の研修生であったイエボ村のスウェウィンさんとは従兄弟関係にあります。ホームステイが始まってすぐ、電車で乗り過ごし、迷って、中学生に交番まで連れて行ってもらいました。犬も



牛の餌を作っているところ

苦手で、ステイ先の3匹に遊ばれています。

ロザさん
(20歳・インドネシア)

シランジャイ村から3人目の研修生となったロザさんは、この3年間日本に研修生として来ることをずっと待ちわびていました。とても小柄で、当初日本での研修にどこまで耐えられるか心配しましたが、今は3人の中で一番落ち着いてしっかり者です。日本の生活や食事には随分慣れましたが、毎朝のお味噌汁はまだ苦手なようです。



ロザさん(左)と家族

はい、こんにちは、
みなさん(お)けんきでいっていらしゃいますが、
わたしがけんきです。きょうはたいひをべんきょう
た。もみすりも。このかからねぎのとセロリのと
エンサイのとまねみかのときゅうりのたねまき。
をべんきょうました。まいにちたんぼでどうさんといは
にいくべんきょういきすぬ。なっとうをつくりました。
どうせ、ありがとございます。
がんばっています。

* 6月8日から研修生はそれぞれ研修が始まりました。ザーナウンさんは兵庫県豊岡市の寺田正文さんのところで研修中です。手紙が届きました。

ザーナウン
2009.6.18.



ネパール

バトさん(右から2人目)と
篠山ナマステ会の方々



研修生の村、 その背景

帰国後すぐに幼稚園をつくったヘルマさん(07年度)、昨年度のペリスマンさん(08年度)に続き、シランジャイ村から3人目の研修生です。シランジャイ村は、幼稚園の先生ミミさん(02年度) エリさん(03年度)、農業のダスウィルさん(99年度)、アフダールさん(00年度)が住むタベ村から30分歩いた標高1,000mの隣村です。電気は普及しておらず、石油ランプを使用した生活です。タベ村を中心として、帰国研修生同士の強い結びつきの中で活動しています。タラタジャラン村ではアルウィさん(01年度)、マラルさん(05年度)が行政も巻き込み、農業用水を整備しています。カウジャングイ村のブットラさん(06年度)は、マラルさんとうがらしを栽培しています。アフリタさん(04年度)は、幼稚園と母子保健、洋裁で村の子どもや女性のために活動しています。

ロザさんは来日前、ヘルマさんと幼稚園や母子保健でいっしょに活動していました。村の問題として衛生面を挙げているロザさんは、日本で保育、保健衛生と洋裁を学びます。

インドネシア



帰国研修生たち

シランジャイ

パダン

今年度、11年ぶりにネパールからの研修生の招へいを再開することになり、昨年夏の面接でビショさんが27期研修生の1人として選ばれました。ビショさんの住むガハテ村では、篠山で研修を受けた1期生のバトさん(82年度)を介して、篠山ナマステ会(兵庫県篠山市)が8年前から小学校支援を続けていましたが、学校の運営も軌道に乗り、支援も一段落しました。次の段階の支援をナマステ会とPHD協会で相談し、今後は村の生活改善を幅広く捉え支援を継続していく目的から、村人を研修生として日本に招き、農業や保健衛生を学んでもらうことになりました。ガハテ村は標高1,100mで、家族は山の斜面を開墾した畑を耕し、家畜を飼育しています。辺りにはトウモロコシなどの野菜や柑橘系の果物などが栽培されていますが、川からは遠く天水に頼る農業を余儀なくされ、さらには山の斜面で移動にも制限が伴う地形で、村やその地域の農業を改善していくためにはどうすればいいのか。

地域ではバトさんのNGOが活動しており、ビショさんは彼らと共にこのような難題を克服し、村の農業を盛り上げ、生活改善につなげていく役割が期待されます。



ビルマ・スタディツアー参加者と帰国研修生
選考に参加した村の人々

パテインジー
マンダレー
ヨンピン
タダイシエ
イエボ
ヤンゴン

ビルマから13人目の研修生です。マンダレーから南東にあるタダイシエ村にはムームさん(93年度)、ティダさん(07年度)が幼稚園、スーティンさん(06年度)が小学校の先生をし、タウンティンテーさん(05年度)が有機農業をしています。その隣村であるイエボ村では、ケンターウェさん(03年度)が薬学部の事務をしながら農業の手伝いをし、スウェウィンさん(02年度)、ゾーウィンさん(04年度)が有機農業に取り組んでいます。スウェウィンさんのお連れ合いであるカインソーさん(96年度)は5才になる子どもの世話と農業の手伝いをしています。3つの村はお互い行き来ができるので、選考、出発前の日本語の指導などにおいても協力体制ができあがっています。パテインジーに住むトゥンタウンさん(94年度)はその調整役です。

ヨンピン村では豆、トマト、茄子、ピーナツ、ヒマワリなどが主に栽培され、米は手がかからないという理由から、ほとんどが直播きです。雨水、水路の水を利用した農業をしています。農作業グループはなく、ここ数年、隣国のタイ、中国から化学肥料や農薬が入り、村でも使用方法、副作用を知らずに使う人が多いことが問題のひとつだと言います。

日本では、有機農業と、村にも入りつつある農機具の整備についても学ぶ予定です。また、日本に来てから生花に興味を持ったようで、花の栽培、販売に関しても勉強できる機会を見つけていきます。

同じ買うなら、使うなら!



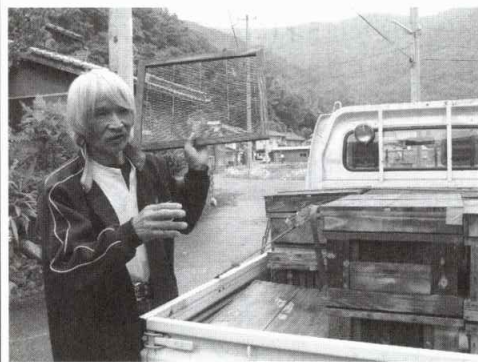
No.14 ハチだけの仕事

抗生物質やホルマリンなどの劇薬をいっさい使っていない添加物や増量のための「混ぜもの」ナシの純正ハチミツ。

「健康なハチミツを作ろう!」そう上垣敏明さん(62歳)が心に決めたのは15年前。無農薬野菜作りや平飼い養鶏(飼料も完全無農薬!)に取り組んでいた上垣さんが次に目を向けたのは養蜂。とはいっても消毒液や抗生物質を使用しない養蜂家は皆無。情報も資料もなにもないところから上垣さんの健康なハチミツ作りの挑戦は始まった。

「上垣さんのこだわり」

「国内・海外産問わず、世の中で売っているハチミツの99%にホルマリンや抗生物質が使われているんですよ。」養蜂家たちが一番恐れるハチの病気、アメリカ腐蝕(フソ)病。その病気にかからない様に、ハチの巣を劇薬ホルマリンに浸し、エサとなる花粉に抗生物質を混ぜているという。養蜂



「『ハチだけの仕事』を待っている人たちがいる。消費者に安全な食べ物を届けるのが私の仕事。」と語る上垣さん

アメリカ腐蝕(フソ)病とは?

セイヨウミツバチだけがかかるハチの幼虫が腐って溶けてしまう恐ろしい伝染病。日本でも家畜法定伝染病に指定されており、発症した場合は拡大を防ぐため養蜂家が飼っているハチすべてが焼却処分になる。

世界一のハチミツ「ハチだけの仕事」

には残留農薬などの定期的な検査が行われておらず、そういった事実を知っている消費者も少ないのが現状だ。

「ハチミツがアブない?」

上垣さんは「健康なハチミツは健康なハチに宿る」と信じている。巣の消毒は、ホルマリンのかわりに流水に3日間つけ、高温のバーナーで巣を焼く。また腐蝕病にかかっていないか週に1度はすべての巣箱(60~70箱)をチェックしている。そして花のミツがない時期、一般の養蜂家は砂糖水をエサがわりにすると、上垣さんは別に貯めていた花のミツをあげるという健康に対するこだわり。上垣さんはハチの巣箱を車に積んで、花を求めて飛び回る。シーズン期は朝5時~夜10時まで、健康なハチミツのために働いた。

「最近どうしてミツバチが激減しているの?」

ミツバチの減少が世界的な問題になっている。上垣さんもミツバチが育たないことをここ3年くらい実感しているという。今まで桜の咲く頃にはハチの数が増え、1箱2段仕様になっていたものが、同じ2段仕様になるのに約1ヶ月半の遅れがでてきているという。上垣さんが今までの経験から感じたその理由は、温暖化と人工林の増加。温暖化によって、真夏には40度を超える日も多くなったが、ミツバチの巣の真ん中の最適温度は32度。暑い日は働きバチはエサを取りにくい代わりに谷川に水を汲みにいき、巣に水を吹きかけて巣を冷やすことが仕事になる。そうするとエサが減り、卵を産んでも育てられないため、女王蜂は産卵をひかえるようになり、ハチの数が減っていく。

また人工林が増えたことで、野花が育つ場所が少なくなり、自然が少なくなったことも影響しているという。

温暖化と自然の減少でハチが死ぬ。自然界はすべての生きものが密接に関わりあっている。このように自然に異変が起きているとこれからは人類にとっても厳しい時代が必ず来る、と上垣さんは危惧していた。

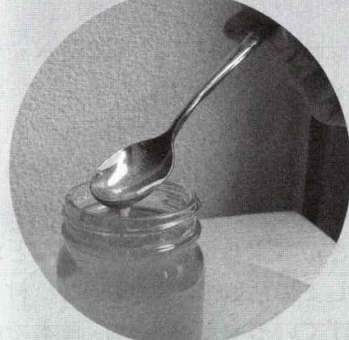
(植田あゆ)

「ハチだけの仕事」を購入するには?

上垣さんから10個のご寄附をうけました。PHD事務所でお受けします。この売り上げは研修生を支える資金に。

直接注文もできます。上垣さんの麦畑自然農場にFAXで住所・電話番号・注文個数(200gか300gか600gかも一緒に記入)を書いて注文して下さい。届いた商品に振替用紙が入っていますので、郵便局から振込みをお願いします。

「ハチだけの仕事」100g 1,000円
(ミツ花の種類によって若干の前後あり)
花はアカシアや栗・トチ・菜の花など



働きバチの一生は1ヶ月~2ヶ月。その間に集めるハチミツの量は1匹あたり小さなスプーンで一杯ほど。ハチの一生をかけた貴重な贈物なのです。上垣さんのハチミツはクセがなく、ずっと舌に溶けていきます。口の中でひろがる甘さには花の香りが漂います。

お問い合わせ先

麦畑自然農場
上垣 敏明・久美
〒667-0321
兵庫県養父市大屋町蔵垣947
TEL&FAX 079-669-0776

農林業体験プログラム~援農

農作業をとらえて考えた



トマトの又芽取り作業

6月13日兵庫県多可郡中町の岡野圭佑さん、美代子さんの農場に農業体験にでかけました。参加者は全部で9名。岡野さんの農場に行かせていただくのは、今回で2度目です。前回は昨年11月下旬、雨の降る寒い日だったので、作業も十分できず、ビニールハウスの中で草引きを数時間ただけで、後は美味しい昼食をいただき、座談会。今回こそはと気合いを入れて、しっかり土にまみれて働くつもりで参加しました。この時期、1ヶ月後のトマトの収穫に備えての作業がたくさんあります。ビニールハウスの中でトマトの又芽取り、伸びて重くなった枝を支柱に沿ってひもで支える作業と、ハウスの中に溝を掘って、水路から溝に水を引く作業の2つに分かれて行いました。それぞれ約2時間の作業でした。

ストレスが土の中に

岡野さんは前回107号の会報の「同じ買うなら使うなら」で神戸にある北野ファーマーズマーケットを取り上げ、取材をさせていただいてからのお付き合いです。サラリーマンをしていた圭

佑さんが初めてじっくり土に触れたとき、ストレスが体から土の中に抜けていくのを感じたそうです。美代子さんも以前は神戸で働いていて、中町に戻り農業を始めてからの収入は、以前の1/4になったそうです。今は毎日飲むお茶、野菜、米、

ソーセージも自家製です。「生きていく上で何を重視するのか」考え、有機農業を始めたと言われます。

ここ最近の「オーガニック」流行

最近、「オーガニック」という言葉を耳にすることが多くなり、有機野菜も以前に比べて購入しやすくなりました。有機野菜を購入する理由は人それぞれ。それでもどうして有機農業なのか?昨年、東日本研修旅行中の交流会で「どうして有機農業なのですか?」と質問を受けた時、「虫も野菜も土も人もみんな一緒に生きていけるから」と、昨年のビルマからの研修生ボーボーハンさんは答えました。

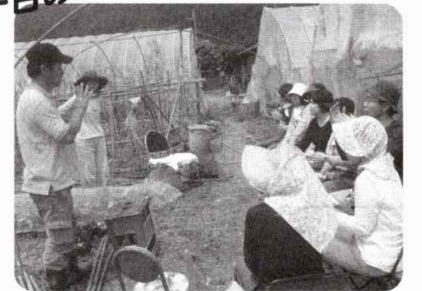
日々の生活の中で

日本では147万ある農家のうち有機農家はたったの1%。「自給率を上げよう」とは言っても、言葉だけでは上がらないと岡野さんは言われます。自分自身が健康であるということはもちろん大切。農家が必要だと言っても、誰もがすぐに就農できるわけではありません。せめて都会で生活していても、選択し、支える消費者でありたいと思います。私たち一人一人が現場の農家の現状を

知り、現状に影響を与える農業政策、農業に直結する環境問題に少しでも関心を持ち、知っていくこと、そしてその農業政策、環境問題には私たち自身も直接的にも間接的にも関わっているということを認識すること。それが「オーガニック」「ロハス」「マクロビオティック」「エコ」などでくられることを流行で終らせないことなのではないかと思えます。

今後も農林業プログラムを実施します。興味がおありの方は、お問い合わせください。(三輪望)

一日のながれ



岡野さんから農場説明、一日の流れを聞く



トマトの又芽取りの作業



畑の真中で岡野さんのところで取れた野菜で作ったいただいた昼食をいただく



農業の怖さ、自給率の問題などの意見交換

参加者の感想



岡野さんファミリーはとても素敵だ!「農業は大変だ!大変だ!でも楽しい!」と笑顔いっぱい働いている。戦力にならない、知識も持たない素人にも作業を丁寧に教えてくれた。思わぬハプニングが起こり、野菜が傷つこうとも、決して怒ったりはせず、とても穏やかに自分達の仕事を伝えてくれたのだ。食べること、生活すること、働くこと、全てを考えさせられる1日だった。西尾真由美(会社員)

第14期国内研修生を募集します！

国内でも平和と健康を担う人材を育成しようと95年より実施している国内研修生制度。海外研修生の研修先に同行し、日本の農の現場、協同組合の仕組みを学びます。西日本研修旅行では水俣病の歴史と問題、筑豊の炭坑問題、広島での平和学習を研修生とともに学びます。また日々の事務所での事務作

業を補助することで、NGOの生の現場を体験します。

内容：PHDの事業を通じた現場研修
1) 海外研修生の研修に同行し、学ぶ
2) 国際理解・開発教育等国内に向けた啓発活動
3) 公益法人における組織運営

対象：日本国内居住者(日本語で

研修を行います)、将来、開発協力・教育・福祉等の分野で働くことを志し、当事務所に通える方。

研修日程：10月より6ヶ月間(週3～5日)1月に国内研修旅行あり。

時間：原則午前9時～午後6時

支給経費：交通費

選考：書類審査後、筆記・面接
(9月上旬を予定)

募集締切り：8月14日(金)必着

PHD NEWS

◆会費・ご寄附寄託状況

| | | | |
|-------|----|------|------------|
| 2009年 | 2月 | 59件 | ¥2,950,031 |
| | 3月 | 155件 | ¥1,704,391 |
| | 4月 | 129件 | ¥1,179,320 |
| | 5月 | 65件 | ¥558,828 |
| | | 408件 | ¥6,392,570 |

多くの方々よりご浄財をお寄せいただき、心より感謝申し上げます。皆様には会員拡大キャンペーンにご協力いただきありがとうございます。新しい年度を迎え、引き続き皆様より、会費ならびにご寄附のご支援を賜れますよう努めてまいります。

◆夏のスタディツアー合同報告会

秋に、夏のスタディツアーの報告会を行います。今年ツアーに行ったけれど他のツアーがどうだったのか知りたい、来年スタディツアーに参加してみたいけれど不安に思っている人など、どなたでも参加していただけます。この夏の村の様子、研修生の活動を報告し、意見交換会、懇親会を行います。



PHD協会にも業界用語がある。「ふりかえり」というのもその1つだ。各行事のあとに必ず「ふりかえり」の時間が設けられている。「反省会」に他ならない。いくら言っても普通の日本語に直してくれない。ある事件(*1)で思い至った。反省は今日行ったことよかったこと、悪かったことを話し合い、次につなげるためのもの。一方ふりかえりは、より内面的・自省なもの(*2)。「自分はどこからきた、今どこにいる、これからどこ

スタディツアーに参加されなかった方も自由にご参加いただけます。

日時：2009年9月12日(土)16:00～
場所：PHD協会事務所(予定)

参加費：500円(資料代)

◆今年も東日本研修旅行行きます

毎年11月に東日本、1月に西日本研修旅行を行い、ご支援いただいている皆さまのところに行かせていただき、交流会を行っています。直接研修生とお話をしていただく機会です。交流会への参加を希望される方は、日程が決まりましたら、ご連絡いたしますので、お問い合わせください。

東日本(11月中旬～下旬)

愛知-静岡-神奈川-東京-山梨-長野-岐阜

西日本(2010年1月中旬)

宮崎-鹿児島-熊本-大分-福岡-山口-広島-岡山

◆A4裏紙ありませんか？

事務所で使う裏紙が不足しています。A4、A3の裏紙がありましたら、お譲り下さい。ご協力よろしく願いいたします。

に行く」常に自分を問い直しながら、生きていくものだとは私思っている。

若い3人の若くはにかんだ研修生にそこまで求めるのは無理かも知れない。しかしこれは万国共通であろう、宗教は違えども。そんな一端も日本で学んでほしいと思う。

*1 勿論SMAP草なぎくん事件。35才になって、ふりかえりを持ってない未熟さを悲しむ。彼にそれを教えなかった周囲の大人に怒りを覚える。

*2 PHD協会は知ってか知らずか、常にこやかに冷やかに言葉の変更については一顧だにしてくれない。(ボランティアS)

〇月×日のPHD協会

この春、神戸は新型インフルエンザで右往左往。さて、ここでは。

職員 川原 ちょうどそのときの週末屋外でフェアトレードの出展。土曜は実施、日曜は中止に。空いた時間に久しぶりのジムトレーニング。健康的。

職員 三輪 ちょうどそのころ、仕事中寒気を感じ、早退。医者に行くことややこしいことになりそうと自宅療養。葛根湯飲んで、一晩であっさり完治。

職員 高垣 ちょうどそのころとは限らず、ここしばらく、年中風邪ひいているのではと、向いに座る職員の弁。それが免疫になればいいけれど。

職員 藤野 ちょうどそのころ、岡山のある大学へ。そこで夏に予定のインド研修を早々に中止したと聞き、夏のPHDツアーの実施が心配に。さて。

職員 佐々木 ちょうどそのころ、横浜におでかけ。考えをめぐらせ、お土産はしゅうまいより、マスクの好判断。神戸のお店は売り切れ続出。

(夏が似合う順)

編・集・後・記

今回から植田あゆさんが編集ボランティアとして仲間入り。一緒にハチの取材に行きました。朝5時起きでの取材、翌日から海外旅行。とてもパワフルで元気いっぱい女性です。編集会議もこれからもっともっと白熱、盛り上がっていくのでは!?(み)

制作協力：坂井時和 松本*顧問*直樹
菅原宗晋 増本一朗 植田あゆ
-再生紙を使用しています。